

3月11日

村上真平

3月11日の朝は晴れていた。この日は農家民宿につかうバンガローの棟上3日目で、研修生の坂田さんと屋根の「棟」を上げる日であった。去年1年間の農業研修を12月で終えた坂田さんが、家作りも学びたいということで、1月から木材の「墨付けと刻み」という構造材の加工、準備を一緒にやってきた。その作業の仕上げであり、晴れ舞台である「棟上」の日であった。作業は順調で、午前中に屋根の母屋(もや)と棟を無事に組み上げることができた。妻と子供たちは福島市の友人のところに出かけていたので、子供たちが帰ってきたら「餅まき」をしよう、と言いながら屋食にささやかなお祝いをした。

午後になって、雪が降ってきたので、予定していた作業は取りやめ、坂田さんは作業場で材木加工、僕は棟上した小屋の最終チェックをするために屋根に上り作業を始めた、その時、その地震はやってきた。ゴゴゴゴという凄まじい地響きと共に、大きな揺れが襲ってきた。振り落とされないよう梁にまたがり、固定したばかりの母屋の束につかまり、地震が去るのを待った。ところが、なかなか止まない、止みかけると、又、大きな揺れが襲うという連続地震である。約5分ほど梁の上で揺られたらどうか、余震は引き続いてきているが、小さくなってきたので、合間をぬって作業を終え、レストランと家の被害状況を見に行った。レストランの中は直売コーナーの商品がほとんど倒れ、床に転がり落ちていたが、食器が数枚割れただけだった。家の中も、本が棚から落ちていたが、ほとんど被害がなかった。しかし、余震は数分毎に起こり、震度4位のもので頻発していた。地震と共に停電になったために、テレビと電話は使えなくなった。軽トラのラジオで情報を集めた。震源は岩手県沖、宮城県沖、茨城県沖、連続して地震が起こり、M7.9(後にM9に訂正される)、しかも、10メートルほどの大津波警報が太平洋全域に出ているという。「これは大変な惨事になる」という胸騒ぎがした。

しばらくすると、集落の組長さんが被害状況の確認に来た。飯舘村では、そんなに大きな被害がなく、みな無事であるとのことで、少し安心をする。レストランの後片付けをし、電気もないので、早めの夕食の準備を始めた。ロウソクの火の下で食事をしながら、「こんなとき、自給をしている農家は強い。米、野菜、穀物、味噌、水、そして、調理をする薪、など生きるために必要なものは全てある。外からのライフライン全てがストップしても、不安は全然ないよね」と坂田さんと話していた、丁度その時、ラジオから福島第一原発の1号機が、非常用電源が壊れて、冷却不能に陥っているとのニュースが飛び込んできた。その時、頭に浮かんだことがチェルノブイリの原発事故だった。反原発の活動に関わっていた僕は知識として、「もし炉心が冷却水から露出し続けて燃料棒が溶け出し始めると、メルトダウンが起こって、最悪の場合、水蒸気爆発を起こす可能性がある」ということを知っていた。そうなれば、チェルノブイリの再来である。僕らの住んでいる飯舘村は原発から北西40kmのところにあるが、その被害が及ぶ半径にすっぽり入ってしまう。「最悪を想定しなければならぬのだろうか」心がざわめい

た。

とにかく情報を集めなければ。軽自動車のバッテリーをはずし、交流変換機をつけ、電話、インターネット、テレビを使えるようにした。刻々と入ってくる情報は、冷却水が炉心の上3mから、徐々に少なくなり、ついに炉心が露出するという事態になった、東電は非常事態宣言をし、原子炉の弁を開き空気圧を下げて、水を再注入していると伝えてくる。「とにかく冷却水が炉心の上まで入ってくれ」と祈るような思いでニュースを見る。夜10時ころ冷却水が炉心より上まで入ったというニュースが入ってきた。原子力の専門家が事態を解説し、「原子炉はきちんとコントロールされた、安全です。」と言った。それを聞いた時、本当にホッとした。他の原子炉も同じような状態であるだろう、同じように対処できるのだろうと思い、眠ることにした。布団に入っても原発のことは頭から離れずに色々と考えていると、深夜2時に妻の日苗と子供たちが雪の中、車で帰ってきた。日苗とは電話で夜9時頃、連絡が取れていた。みんな無事で友人の家に居るといふ。「雪も降ってきたので、明日の朝、帰る」といつていたので、何かかと思っ外に出てみると、日苗は「すぐに逃げよう！」と叫んだ。

彼女の話を知ると、友人宅に反原発運動をしている友人が偶然に訪ねてきていて、一緒だったという。その人が反原発運動の仲間からの情報を集めたところ、第一原発は炉心が再び露出し、そのままの状態が続くと最悪のケースが予想されるからすぐに一緒に逃げようと言われたという。でも、僕と研修生の坂田さんを置いてはいけなないので、反対を押し切って、家まで帰ってきたらしい。「それは10時前の話じゃないのか、テレビでは冷却水が入って、炉心は問題ないといっていたよ」と言うと、「テレビの情報は遅れているし、重大な情報が知らされてない」いう。そこで、日苗に落ち着くようにいい、インターネットで最新情報をさがしてみた。すると、12日午前2:05に炉心が再び露出したという記事を見つけた。頭を殴られたようなショックを受けた。原子炉はコントロールを失い暴走しかけている。どのくらいの時間の余裕があるのか分からなかったが、す早い行動が求められていると感じた。坂田さんに避難することを告げ、とりあえずの着替えと食料を積み込み、原発から北西に約100kmほど離れている山形の高島町にいる妹のところに向けて、午前3時に出発し、朝6時に妹の家に着いた。その日はテレビとラジオで原発の状況を見守っていたが、12日の午後3時ごろに第一号機の原子炉立建屋で水素爆発。13日は3号機が冷却水減少、炉心露出と1号機と全く同じ問題を起こした。この現実を見ると、東電も政府もこのような事態を全く想定していなく、何をしたいのか分からない状態なのだと感じた。14日の早朝、坂田さんを岐阜県にいる妻の元へ送りながら、日苗の実家である浜松に行くために山形を出発した。その日は車の中で3号機が非常に大きな水素爆発を起こしたことを知った。

第一原発ではその後、4号機の建屋水素爆発、2号機の原子炉格納容器破損、原子炉からの1000万倍の放射能を含んだ水の流出と「想定外」の事故を起こし続け、17日以上たった3月28日現在、ひとつの原子炉もコントロールできなく、放射能の垂れ流し状態が続いている。

浜松市にある日苗の実家に泊まり、今後のことを考えているとき、福島県から避難した日苗の友人2人から「受け入れてくれるところを知りませんか」という問い合わせを受けた。日苗から「15人位の人が非難できる、どこか良いところないかな」と聞かれたとき、頭に浮かんだのは三重県伊賀市にある愛農学園と愛農会であった。僕は愛農学園の卒業生であり、愛農会の理事でもある。早速、愛農会の事務局長山本さんに連絡をし、避難者受け入れの要請をした。山本さんは愛農学園の奥田校長と同窓会長の水野さんに相談をし、同窓会館を避難者のために使わせてくれること申し出てくれた。それまで、僕ら家族は岡山の友人のところに行くことになっていたが、予定を変更し、16日愛農に向かった。

3月28日現在、愛農学園には福島県と茨城県から11家族39人が原発の放射能を避けるために避難している。それぞれが、故郷に家、土地、友人たちを残し、着の身着のまま、避難してきている。避難者の半数以上が0歳から11歳までの子供たちである。それぞれが、重い現実を背負い、これからどうしようと、迷い、葛藤している。僕の出身地である飯舘村は30km 圏外ではもっとも放射線の量が多く、セシウムによる土壌の放射能汚染度はチェルノブイリの強制移住地を決めるための基準値の6倍であるという。それが本当ならば、もう農業を続けられないということである。入植して9年、5haの敷地に自然農園、自然食レストラン、石窯、バンガローを作り、この春からは、エコビレッジ・コミュニティをめざして、共同してくれる家族が移住して来ることになっていた。美しいあの風景を思い出すたびに、心が痛むが、今は後ろを振り返る時でない。共にいる39名の避難者たちがそれぞれに落ち着いた生活を始めるためにすることが山積みである。その責任を一つ一つ果たしながら、今を生きてゆきたい。

この大震災と原発事故は、私たち人間一人一人に根源的な問いを突きつけていると思う。それは、「私たち人間が、自然を収奪し、汚染し、命を使い捨てすることを必要悪として是認する、原発に代表されるような現在の生き方を、今後も続けるのか、それとも、根源的に問い直し、生き方を変える歩み始めるのか」という問いなのだと思う。